学 位 論 文 要 旨

学位論文題目　　日本統治時代の台湾における美術のローカル・カラーに関する研究

申 請 者 氏 名　　王宇鵬

台湾における官設美術展を中心にした植民期（1895－1945）の近代美術史研究において、常に課題としてあげられるのは、ローカル・カラー（地方色）である。また、近年、ローカル・カラーを展覧会のテーマとする例も見られるようになった。ローカル・カラーは第二次世界大戦以後においては重要な課題となる「カルチュラル・アイデンティティー」、「ナショナル・アイデンティティー」と連続する問題であり、アジア諸国において共通の重要な課題である。すなわち、外部からの期待としての「ローカル・カラー」は文脈によって、或は個々の作品によって、内発的な「アイデンティティー」形成に転換する。その「ローカル・カラー」と「アイデンティティー」は、アジア近代美術の重要な要素である。

ローカル・カラーとは、その地方に特有の言語・人情・風習・自然などである。美術における台湾独自の特徴を強調するローカル・カラーという表現形式は、1927 年の第 1 回台湾美術展覧会の開催に当たって、総督府文教局長の石黒英彦が「臺灣の特徴を多分に取入れたる、所謂灣展としての權威」の発揚を目標に揚げたことによって始められた。1927 年の台湾美術展覧会の開催によって、新美術は「西洋画」と「東洋画」の 2 つのジャンルにも「写生」と「ローカル・カラー」という 2 つの指標が与えられた。写生観念は西洋化の所産で、日本近代美術にも共通する課題であるが、ローカル・カラーは植民地台湾で注目されていたテーマである。

それゆえ、ローカル・カラーについての議論は当時も、そして、戦後の美術史研究でも注目されている。例えば、ローカル・カラーについて最初に言及したのは王秀雄である。王秀雄（1991）によると、台湾のローカル・カラーは「南国特有の燃えるような原色」をはじめ、「台湾特有の自然景観や動植物、台湾の街並、風俗・人情、宗教や民間行事、先住民の風習や生活などの『郷土芸術』までも」が含まれている。

さらに、総督府には「臺灣美術展覧會は、……島民に和やかな情操を持たしめるのは勿論、近時頓に叫ばれる様になつた皇民化運動の一助としても忘れることの出來ない一役を付せられてゐるのである」という意図があった。そのため、顔娟英と陳明は、台湾人画家が表現した台湾美術のローカル・カラーには「独立性と自覚性」が不足している、すなわち美術文化のオリジナリティーが見えないと結論づけている。

しかし、台湾のローカル・カラーを考えるには、日本人画家や日本人美術教師の意識、台湾人画家の中の自らのアイデンティティーと創作意識など、総督府の意図を超えた様々な要素を考慮する必要がある。また、日本統治以前の台湾の文化は中国文化の延長である

が、台湾は日本の植民地になった後、文化の本質は日本から持ち込まれた内容の比重が高くなった。美術界においては、特にこの傾向は強かった。例えば、1895 年からの日本統治によってもたらされた東洋画が、清朝の文人画と入れ替わり、台湾美術の主流になった。よって、台湾の近代美術は植民地時代に中国大陸・日本・台湾の三者からなる関係で形成された近代台湾文化を背景として生まれたものであると言えるが、中国大陸・日本・台湾の 3 つの観点からの日本統治時代の台湾における美術のローカル・カラーに関する研究はまだ行われていない。

そのため、本論は日本統治時代の台湾における美術のローカル・カラーには美術文化のオリジナリティーが見えないという見解とは異なった観点を提出し、政治の立場を超えて中国大陸と日本と台湾の 3 つの観点から見た場合、日本統治時代の台湾における美術のローカル・カラーとは一体どのようなものであるかを明らかにした。

本論の研究方法は、文献研究と実態調査を基本とし、史料、書籍、新聞、論文などの文献研究と、美術文化と関連する実態調査である。

本論文は序章、本論 7 章、終章からなっている。各章の概要は以下のようになる。

序章では、問題の所在、先行研究の検証、先行研究の問題点と研究目的、研究方法を記述した。

本論は中・日・台の 3 つの観点から見ると、日本統治時代の台湾における美術のローカル・カラーとは一体どのようなものであるかを明らかにすることを主旨とし、この主旨に沿って、まず中・日・台の 3 つの地域から美術史資料の収集と全般的な考察を行った。これは、先行研究の不足を補充する意図も含む。この部分は本論の第 1、2、3 章に記述した。

第 1 章では、日本統治初期における美術のローカル・カラーという概念がどのように形成されたかを明らかにした。日本統治時代初期、台湾社会の発展に伴い、美術は次第に台湾の紹介・宣伝の主要な手段となっていった。石川欽一郎をはじめとして、日本人画家は自分の眼を通して台湾の美を発見した。このように、ローカル・カラーは日本人画家の台湾風景観によって「台湾の紹介・宣伝」から「美術の言語」へ次第に形成されていったのである。

第 2 章では、第 1 章で論述した台湾美術のローカル・カラーの形成に基づき、ローカル・カラー創出の基盤である美術教育を考察した。日本統治時代の台湾の美術教育は、1902 年に師範学校において「図画」の科目が増設されたことに始まる。植民地における「啓蒙教育」は宗主国の国家権力の下にあることであり、植民地の住民の利益を考えるのではなく、そのあらゆる利益の出発点は宗主国の角度から考えられていた。中・日・台の 3 つ観点から見れば、植民地台湾での美術教育の啓蒙も同様であるが、このような状況であったにもかかわらず、美術教育は台湾の近代美術の発展を促進した。これは図画教育と日本人美術教員の指導とに関係がある。台湾人学生と日本人画家や日本人美術教員の間には政治的意図を超えた純粋な師弟愛が存在していた。同化政策の下で、日本人美術教員の意識は、同化教育政策に従ったのではなかった。むしろ、台湾人であることを尊重することによって、「内台一体」という完全な同化の理念の実現に逆行する要素であったとも言

える。美術教育から見る台湾のローカル・カラー創出の基盤においては、台湾人画家には独自の美術文化のオリジナリティーが存在していた。

第 3 章では、新美術運動において台展が果たした役割および美術におけるローカル・カラーの創出を考察した。美術における台湾独自の特徴を強調するローカル・カラーという表現形式は、1927 年に文教局長の石黒英彦が創出し、美術教育の教育方法が伝統的臨画から西洋的写生に変わったことの影響により新美術運動における舞台の役割を果たした台展で発展した。日本の美術に対して台湾の特徴を持った美術を作り出すという、日本と台湾の閉じた二者間におけるローカル・カラーの創出だけではなく、西洋近代美術が世界へ浸透していく中で、西洋の影響を受けた新しい美術文化の形成が台湾で始まっていたということである。そして、台展の時期から、日本文化と同時に西洋文化の影響をも受けていた。

次は、本論の第 1、2、3 章に基づき、作品の検討を通して、第 4 章では東洋画家の郷原古統と木下静涯を例として日本人画家はどのように台湾のローカル・カラーを表現してきたかを考察した。郷原古統と木下静涯は、台湾に対する愛着を持っていたと同時に、外来者の視線で台湾特有の花鳥や雄大な自然を題材とし、台湾のローカル・カラーを表現した。2 人の共通点は西洋絵画の写実の観念を学び、写実的な技法で目に見える自然の風景を描写したことである。郷原古統と木下静涯は台湾の生徒らに特別に親しみを持っていた。一方、生徒らはこの 2 人の日本人に対して父親のような敬愛の気持ちを持っていた。日本統治期の東京美術学校の教員たちと比べると、郷原古統と木下静涯は台湾に対する郷土愛にも似た感情を持っていたと考えられる。台湾人学生と日本人画家や日本人美術教員の間には政治的意図を超えた純粋な師弟愛が存在していた。日本統治時代の台湾のローカル・カラーを論じる場合、植民地文化の優越感や統治管理の必要性、帝国領域の意味を持つ作品、台展の審査員という身分などよりも、日本人画家や教員、審査員の台湾に対する感情の検討が必要である。

第 5 章では伝統絵画における台湾のローカル・カラーの表現を明らかにした。日本帝国主義の意識形態の推進の下で、台湾の美術におけるローカル・カラーも単一のものではなかった。南画のローカル・カラーも台湾のローカル・カラーの表現形式の一種であったと考えられる。そして、台湾の近代美術をより客観的に見るなら、台湾人画家や日本人画家への中国大陸からの影響があったと考えるのが妥当である。つまり、中・日・台の 3 つの観点から台展が唱えたローカル・カラーを検討する必要がある。

第 6 章では彫刻家・黄土水と洋画家・陳澄波を例として、台湾人画家はどのように台湾のローカル・カラーを表現したかを考察した。黄土水と陳澄波の表現したローカル・カラーから故郷台湾と中国への表象が見える。彼らは宗主国日本の国家意識と日本画壇の日中美術交流の影響を受けつつ、中国の伝統文化を基盤として、西洋の現代美術と結び合わせて故郷台湾の特色を有する作品を制作した。つまり、彼らは故郷台湾と中国大陸と日本の 3 つのアイデンティティーの狭間にあって、自らの才能を開花させたのである。

第 7 章では台展三少年と呼ばれた陳進、林玉山、郭雪湖を例として、「台湾人画家が表現したローカル・カラーには美術文化のオリジナリティーがあり、そのローカル・カラー

には中・日・台の美意識が入り混じっている」とする仮説を検証した。陳進、林玉山、郭雪湖の作品からは、中・日・台の美意識が入り混じって融合された結果としてのアイデンティティーを見ることができる。そして、それは絵画の技法や理念などの融合ではなく、「中・日・台」の表象である。すなわち、中国の伝統文化を享受し、中国の伝統美術を基盤にして日本の影響を受け入れて故郷台湾の独自性が生み出された。

終章では、本研究で得られた成果及び結論と今後の課題について述べた。

中・日・台の 3 つの観点から見ると、台湾人画家が表現した台湾美術のローカル・カラーには「『独立性と自覚性』が不足している、すなわち美術文化のオリジナリティーが見えない」のではなく、美術文化のオリジナリティーが見える。総督府が提唱したローカル・カラーの下で、総督府の意図したこととは異なった結果になったが、結果的に日本人画家と日本人美術教師と台湾人画家との 3 者が共に努力したことにより、ローカル・カラーは台湾の近代美術史上に、台湾美術思潮の一つの発展の特色をもたらした意義を有していると見做すことができるという結論を得た。

今後の課題は、台湾の日本統治時代に形成したローカル・カラーが戦後の美術界にどのように展開されたかが今後の課題として研究を続けたい。

（様式９）

学位論文審査の概要と結果

報告番号	東アジア博 甲 第 121 号	氏　名	王　宇鵬
論文題目	日本統治時代の台湾における美術のローカル・カラーに関する研究		

（論文審査概要）

序章「問題の所在と提起」では、日本統治時代の台湾美術をめぐる従来の研究についてまとめ、台湾・中国・日本という３つの観点を統合し、近年美術史研究で注目されている「ローカル・カラー」のあり方を見出すことを課題として設定している。

第１章「日本統治初期における台湾美術のローカル・カラーの形成」では、統治時代初期にはローカル・カラーは台湾の紹介・宣伝の手段となっていたが、やがて日本人画家によって、「美術の言語」へと変容していったとする。

第２章「美術教育からみるローカル・カラー」では、台湾に設立された師範学校や中等学校において図画が導入されることとなり、その日本人美術教師によって教育課程とは独自に画家が養成されたことで、台湾人画家に独自の美術文化が発展していったことに注目している。

第３章「新美術運動とローカル・カラーの創出」では、総督府の手で開催された官設の台湾美術展覧会（以下、「台展」とする）が、台湾人画家にとっては相互鑑賞の機会となり、社会的地位を確立する場ともなったことを述べる。そして西洋画、東洋画、彫刻などを含み、中国の伝統的な文人画と区別される新美術運動の舞台となっていたとする。とくに「台展」においては、台湾独自の特徴を有する美術を創出するよう求められたことから、台湾美術にローカル・カラーが定着するきっかけとなったとする。

第４章「日本人東洋画家の表現した台湾のローカル・カラーから見る『台湾愛』」では、台湾での「東洋画」導入に大きな役割を果たした２人の日本人画家をとりあげる。そして従来いわれるような植民地主義に基づくものとは異なり、台湾に一種の郷土愛をもち、また弟子たちとは師弟愛を育みながら台湾特有のローカル・カラーを表現したと評価している。

第５章「伝統的絵画における台湾のローカル・カラー」では、従来、「台展」が中国の伝統的絵画の影響を断ち切ったものといわれてきたことに対し、日本人審査員によって中国の伝統的水墨画は評価されており、それによって中国の伝統絵画もまた台湾のローカル・カラーの構成要素となっていった。そうして「東洋画」という、日本画とも融合した新しい方法が定立されたことを述べている。

第６章「ローカル・カラーから見る故郷と中国の表象」では、日本に留学した台湾人画家を取り上げている。その作品の分析を通して、台湾を故郷とし自らのアイデンティティーとすることで、中国の伝統様式とは異なる作品を生み出したと評価している。したがってそれを、「台展」に先駆けた新美術運動の嚆矢となるものと位置付けている。

第７章「『中・日・台』の美意識から見るローカル・カラーの美術文化のオリジナリティー」では、「台展」で活躍した「台湾三少年」と呼ばれる３人の画家の作品を具体的に分析し、中国の伝統的な絵画を基盤に、日本で学んだ技法を組み込み、台湾の故郷愛を表現していることを論じている。

終章では以上の内容をまとめ、今後の課題について述べている。

１．創造性

従来、日本・中国・台湾それぞれの視野から検討されてきたことを統合し、統治下の台湾美術には、日本による影響、中国の伝統的絵画、台湾の風土に即した独自性という３つの要素が併存

していたことを解明した。とくに、総督府側の手による「台展」とは別に、美術教育や美術教師の手によってローカル・カラーが育まれてゆくとの視点は独自なものである。したがって創造性については優れていると評価できる。

２．論理性

近年美術史研究で注目されているローカル・カラーの概念を用いて、統治下台湾美術の独自性を見出そうとしている点、そのさい、近年の文化研究で取り上げられるグローバル化などの方法もとりこんで、日中台の融合からなる独自の文化を見出そうとしており、一貫性のある展開から結論が導かれている。したがって論理性は達成できているといえる。

３．厳格性

台湾での美術教育、総督府による「台展」、日本に留学した台湾人など、それぞれの局面から、関係する先行研究を広く渉猟したうえで、それらをふまえて立論しており、厳格性は達成できているといえる。

４．発展性

台湾におけるローカル・カラーの発展を、美術教育や美術教師に注目してとらえる点は筆者の研究における立ち位置を表す独特の視野であり、この方法をもって、たとえば1945年以降の台湾美術の推移についても検討可能だと思われる。こうした点から発展性は優れていると評価できる。

以上より、最終試験結果を合と判定した。

論文審査結果
合・否

審査委員　（氏 名）森下 敬

（氏 名）廣岡 亮

（氏 名）中野良寿

（氏 名）石井 由理

（氏 名）　　印